

# 科学論文における 共著者の責任

県立県民健康科学大学長 土井 邦雄



アメリカや先端的な研究を行う国では、研究論文の著者と共著者は、研究の知的活動に実際に貢献した研究者だけに限られている。

しかし、日本では若い研究者が筆頭著者の論文であることが社会習慣だった時代、若い研究者は、強要され、共著者として多数の研代がある。教授が実際に指導している場合は問題ない。この研究者が含まれている場合、指導せずに「指導する立場の教授」と仮定される。場合にも共著者になっていい。査読者が「内容があまりに稚拙であるが、著名な共著者は一体この原稿を読んだのか」という疑問が出る。査読者がこの著名な研究者を「場の教授」は、指導し原稿を、読む必要がなくなる。若

一方、日本には多くの優れた研究者や共著者がいるのも事実だ。小保方さんの論文には、多くの共同研究者が含まれているが、共同研究者たちはその責任を果たしていたのだろうか。この不幸な出来事は日本の研究者と日本の科学にとって貴重な教訓だと思ふ。不適切な共著者を早急に日本から排除することが急務だと思ふ。

理化学研究所の小保方晴子さんのSTAP細胞に関する論文の問題は、研究者だけでなく日本中の注目と関心を集めている。重要な疑問は、「STAP細胞は存在するのか」「この研究には不正が含まれていたのか」「だれの責任か」「なぜこのようなことが起こったのか」などだが、日本では、今まで無視され続けてきた「共著者の責任」の問題も関係している。

## 貢献しなければ排除を

最近では、多くの英文の学会誌や科学ジャーナルでは投稿の必要条件として、知的活動へ貢献していること、原稿を読んだこと、最終原稿を承認したことなど

本人に尋ねると、「原稿が投げられたことを知らない」と返事する場合もある。これは明らかに「あつてはならない」こと。そこで「何故このようなことが起こるか」を分析し、その

一方、経験ある研究者の論文でも「原稿への知的活動の貢献がほとんどない上司や同僚」を共著者にする場合がある。上司によって

著者は署名し、社会的な責任を取ることに要求される。若くは研究の投稿原稿に「いじめや昇進の阻止」を

「いじめや昇進の阻止」をほ

早稲田大 米・シカゴ大名誉教授、文部科学大臣表彰科学技術賞受賞、著